

日本の戦闘者



荒谷 卓（あらや たかし）
生年月日：昭和34年秋田県出身
略歴：昭和57年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職（1等陸佐）。
海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会：熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊―最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動じない力』三笠書房／『日本の特殊部隊をつくったふたりの“異端”自衛官―一人は何のために戦うのか！―』ワニプラス
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>

日本の戦闘者の資質について話をしてきたが、なんといっても日本の戦闘者なんだから本物の日本人でなきゃならねえよな。そこで、今回は、本物の日本人について話をする。本物の日本人とは、『日本の建国以来の歴史に誇りを持ち、その歴史を貫く信仰的価値観を共有し、これに基づいて考え行動する歴史的集団である』。『信仰的価値観』について説明する。国を形成する集団が成立するためには、人々が共に行動できる共通の考え方が必要だ。しかも、それが、たまたま個人が持っている価値観が共通しているというだけじゃあ国にはならない。集団の道徳的規律が帰属する個人の価値観を形成することで、初めて国が成り立つ。つまり、日本人の「良心」や「理想の自己」は日本人という集団の歴史的道徳規範によって作られているとい うことだ。これが無くなれば、日本人という歴史的集団は消滅し、近代西洋で発明された個人の権利を守るための契約的集団である日本国民か、グローバル・ガバナンスの管理下に置かれるただの個人しか残らない。

熊野飛鳥むすびの里では、2月11日の建国記念日に「神武天皇建国の意義を学ぶ」文化研修を開催している。今年は、4日間かけて、神武天皇建国の御事績を実際に現地を訪ねて研修した。神武天皇が大和に都を開く以前、日本の国土には、父系縦型家族の家を柱とする小規模共同体が点在していた。占領米軍監督下の教育が始って以来、この時代の名称を「縄文時代」と呼称するようになったが、日本の歴史的呼び名は、大国主神（おおくにぬしのかみ）の「国造りの時代」と呼ぶ。『大国主神』は、別名「大物主神（おおものぬしのかみ）」または「大穴牟遲神（おおなむじのかみ）」と呼ぶように、全国に在った定住共同体の中でも特に勢いのあった出雲や大和などの地域の家長の先祖の事をそのようにお呼びしたのだろう。この時代の史跡は日本全国に極めて多数確認されており、古いものでは17000年前のものが確認されている。つまり、日本人は17000年も前から同じ地域に定住できる文化を育んできた世界最古の集団である。イギリスの歴史化トインビーが定義した4大文明なる地域が、今ではすべて砂漠化しているように、人間が住めば土地が疲弊荒廃し不毛地帯となっていく他国の歴史と違い、日本では、1万年以上人間が住んでも豊かな自然環境を維持できたわけだ。その理由は、その土地の自

然風土、土地のエネルギー（これを日本人は「産土神（うぶすなのかみ）」と呼んだ）、昔と将来、祖先と子孫、全ての生き物が全て一体となって生きる人々の定住共同体だったからだ。その土地の歴史を継承し将来を創造するため、その土地の生命活動に加わり、全身全霊で生を全うしようとする人々だ。一つ所の土地に根を張って暮らす共同体の生命活動は、人間が地球そして宇宙の生命活動に参画することと同じことだ。人間が社会生活を持続的に続けるためには、その共同体社会を土地（自然風土）の上に打ち立てるしかない。自然風土とは個々の生命活動の総称であり、相互に深く結びついているので分割できない。分割して人間が所有することは、それだけで自然風土を破壊する。そして、天地自然の中では交換価値という資本主義的な尺度は見当たらない。その土地の自然の一部として、人間が自然の生命活動に加わり、働かかけたことによってもたらされる豊かな恵みを分け合えば十分に生きていけることを日本人は1万年以上も実証していたわけだ。

これらの定住共同体は、夫々交流があったことは遺跡の出土品からも確認されているが、家を中心とした文化道徳規範を有する共同体の地域的広がりには限られていた。この日本全国に点在した小規模定住共同体を、現在の日本という地域的広がりでの文化道徳規範を共有する集団に纏めるための最初の行動を起こしたのが神武天皇であった。神武天皇という名は諡（おくりな：崩御されてから偉業をしのび奉る御名）で天皇の御位に即位される以前の名は「神日本磐余彦命（かむやまといわれびのみこと）」とお呼びした。4人の御兄弟の一番末っ子であった。

この御兄弟は、日向（現在の宮崎県）の高千穂の宮に在って、「この国を平和で安らかな国と成るようにしろしめせ」と御先祖（天照大神）から授かった使命を果たすにはどうしたらよいのだろうか」と相談をした。そして、西の辺境の日向から東（国の中心にふさわしい地）へと進もうと決めた。一行は、日向の美々津を出発し、先ず豊国（現在の大分県）の宇佐に立ち寄った。その後、筑紫（現在の福岡県）に1年、安芸（現在の広島県）に7年、吉備（現在の岡山県）に8年ほど居て、稲作を伝えつつ東進の基盤づくりをした。そこからさらに瀬戸内海を東へと進み、日下の蓼津（くさかのたでつ：生駒山の西）迄進んだところで、登美（とみ：現在



和歌山県新宮市にある神倉神社ゴトビキ岩。

の奈良盆地の地名）の長脛彦（ながすねひこ）の軍隊の抵抗に遭った。この戦で、長兄の五瀬命（いつせのみこと）が負傷し雄叫びを上げて亡くなった。御陵（はか）は和歌山市竈山にある（日本で唯一の金の勾玉が出土）。御兄弟は「日の神の子孫である私たちが日に向かって（西から東へと）戦ったのはよくなかった。日を背にして攻撃できる陣形をつくろう」と、紀伊半島を大きく迂回して、大和の東側にあたる伊勢方向へと海路前進した。一行は、前方の様子が開けてよく見える熊野の神の村に在る天の磐楯（あめのいわて：現在新宮市の熊野速玉大社摂社神倉神社の御神体「ゴトビキ岩」）に登って、行く先の様子を確認した。そこから再び海路北進したのだが、熊野灘で嵐に遭遇し、一行の船は熊野の荒坂の津（熊野市楯が崎から二木島辺り）に漂着した。旧暦の6月だから丁度台風の季節だ。この海難で、次兄稲飯命（いなひのみこと）と三兄三毛入命（みけいりのみこと）が嵐を鎮めようと身を海に投じて亡くなった。稲飯命の御遺体は、「二木島の土地の人が屍をおさめて帰り之を奉葬した」と社記に伝わる室古神社（むろこじんじゃ：二木島湾の西）にお祀りしている。三毛入命は、屍は見つからなかったが御魂を阿古師神社



三重県熊野市にある熊野荒坂の津記念碑。

（あこしじんじゃ：二木島湾の東）にお祀りしている。また、二木島の漁村には、「かつて地元の漁民がカツオ船で神武天皇を助けに急行した」古事を起源とする古代の例祭を厳格に継承する「二木島祭」がのこっている。

今年のむすびの里の研修では、実際に船で海上に出て、海難に会った熊野灘から漂着した熊野荒坂の津（楯が崎）に行き、そして、この海難でなくなった神武天皇の御兄弟を祀る室子神社と阿古師神社（二木島）に参拝した。参拝にあたっては、荒谷が御兄弟の故郷である高千穂神社で下賜された御神酒をもってお参りした。

神武天皇一行は、熊野に上陸したものの熊野の神の毒気に罹り全員気を失う。この辺りに、熊野古道「逢神坂峠」というところがある。実際来てみればわかるが、海岸から柱状節理の山がせり上がり、植生は厳しく、毎日のように霧が立ち上る神秘的な土地だ。この危機を助けたのは、高倉司（たかくらじ）という熊野の住人だった。高倉司は、建御雷神（たけみかづちのかみ）から授かった節霊（ふつのみたま）という剣を持って神武天皇のもとに参上した。すると、たちまち神武天皇と士卒全員が再び覚醒したと伝わる。この高倉司を祀る神社は、新宮市の神倉神社とや



熊野灘から見る楯が崎（三重県熊野市）。



三重県熊野市の室古神社。



三重県熊野市の阿古師神社。

熊野市の大丹倉（おおにくら）という熊野のグランドキャニオンのようにせり立った山の頂上に存在する。節霊の剣は、後に10代崇神天皇によって奈良県天理市の石上神宮（いそのかみじんぐう）に祀られた。節霊の剣は、石上神宮の御神体として境内の禁足地の土中にお祀りされていたが、明治になって御神域の調査発掘をした際に、実際に土中から石棺に入れられた状態で出土している。

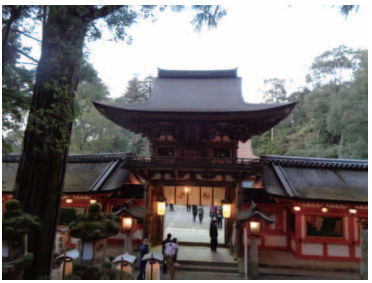
復覚した神武天皇御一行は、態勢を整えられ、この地熊野から橿原に向け険しい陸路を約100km前進された。この経路は、現在国道169号線が通っているが、崖崩れなどでしばしば通行止めになる本当に険しい道のりである。その御苦労は並大抵ではなかったであろう。俺が住む飛鳥町はその出発後にあたる。



三重県熊野市にある熊野古道伊勢路の逢神坂峠。



三重県熊野市の高倉剣大明神（大丹倉山頂）。



奈良県天理市にある石上神宮。